

て注目されるのは凡例が『翻訳断毒論』と異なり、最初の第一丁は『断毒論』と、巻首題、著者名、版心題は異なるが、本文は全く『断毒論』と同じで、しかも第二丁以降は版心題も『断毒論』と記載され、『断毒論』と同じ版木を使用していると深瀬氏は指摘しており、演者も同様の見解である。このことから文化10年に京水らに版木は押収されたものの、文化11年7月までには返却されていたことが判明する。また『国字断毒論』の末尾に花溪大機の跋文に文化8年とあることから、すでに『国字断毒論付録』(近日中に続断毒論出版とあるのは、この国字断毒論付録と思われる)の草稿は文化8年の段階で完成していたと思われる。どのような理由で文化11年まで引き延ばされたのかは不明であるが、少なくとも文化10年の版木押収事件が出版への契機となったのではないかと推測される。『断毒論』には文化15年に石坂宗哲が序を書いた別本も存在する。

以上のことから、『断毒論』の本文の内容は漢文体の『断毒論』2巻、漢文かな混じり文の『断毒論(国字断毒論)』1巻(但し凡例は異なる)、『断毒論付録』の4巻本で構成されていることになる。

2. 『断毒論』と『断毒論』の比較と差異

『断毒論』と『断毒論』には目録題に差異がある。『断毒論』は総論、痘源、痲源、梅源、疥源、方土異気、形質、或離、内外、天稟毒気、有害無毒、毒気和不和、定分、一生一患、諸家病源、痘痲無臟腑之別、痘痲闇気運、伝染非常、同気感応。予防、方證、避痘、避痲、『断毒論』では発端、痘瘡の濫觴、麻疹の濫觴、梅瘡の濫觴、方土の異気、天稟の毒気、一生一患の弁、萬病萬毒の弁、痘瘡を避る弁、麻疹を避る弁である。『断毒論』には、『断毒論』の形質、或離、内外、天稟毒気、有害無毒。毒気和不和、定分、一生一患、諸家病源、痘痲無臟腑之別、痘痲闇気運、伝染非常、同気感応、予防、方證の目録題が存在せず、逆に万病万毒の弁の目録題が存在している。

総論、痘源、梅源、痲源は『断毒論』の発

端、痘瘡の濫觴、梅瘡の濫觴疥瘡の濫觴にそれぞれ内容も対応している。しかし、方土異気以降は目録題もその内容も方證までは必ずしも『断毒論』、『断毒論』は対応していない。このことは医師向けの『断毒論』には伯寿の考える病因、診断、治療が書かれ、庶民向けの『断毒論』には伯寿が当時の庶民に必要と考えた医学知識を述べられている点が興味深い。

3. 伯寿の伝染病の病因

『断毒論』の「発端」、「痘源」などの中で、痘瘡、麻疹、梅瘡、疥瘡の四病は毒力が強く、ヒトからヒトへ接触などにより伝染する異国からの伝染病であると記している。(伝染は臭気、接触、食物によりおこる)

「形質」の中で「其の人の傷す者は、風寒中の沴気也。」と述べ、さらに「其の人に感じ某の病を為すは某の形質を顯す。…(中略)…萬の形質、氣中に持つ也。」と記し、「天稟の毒気」において、「身の万物を感応し、皆先天の成る所なり。」「邪毒條焉来て病むに非ず。其の気すでに身中に存りて、外と相応ずる也。」と記述している。このことは、元來体内の形質の中で、先天的に病の毒があり、外側から毒気が内部に入りこむと両者が感応して病を発症させる。この毒気には萬毒があり、体内にも体毒として先天的に萬毒が存在している。例えば痘瘡の毒気が外部から体内に侵入し、体内にある痘瘡の毒に感応して始めて痘瘡が発症するという理論である。「有毒無毒」では体内にある毒の有無で伝染が決まるし、「毒気和不和」では、正気の大小で解毒が決まり、病状の強弱に影響する。「一生一患」では、体の中で内外の毒が感応し内毒がすべて消失すると、再び外部から毒が入ってきても再び発症することはない。しかし、外部から毒気が浸入し、内部に毒が発症した後も残っていると再び発症する。「痘痲無臟腑之別」では伝染病は毒が強いいため、「痘痲は、形有る者に於て、蓋し諸瘡の形と異なる。」と述べ、従来中国伝統医学の痘瘡、麻疹などの病因論では伝染病は説明できないと記述している。

このことは伯寿は従来からの天行による病、傷

寒などを無形の病と分類しある程度中国伝統医学の概念を肯定しているが、有形の病である伝染病では従来の理論は通用しないと否定している点が

特徴的である。

(平成22年4月例会)

書籍紹介

水谷惟紗久 著

『18世紀イギリスのデンティスト』

近代日本の医学・医療制度はドイツを範として創始され、その後は独自の発展を遂げて現在に至っているが、歯科医学はアメリカの影響が強く、欧州からもたらされたものはそれほど多くはないと思われる。本書は、歯科医療の原点の一つが英国にあると考えて、18世紀における歯科医療が当時の英国の社会に、どのように受け入れられていたかを、新しい手法を用いて解明しようと試みたものである。

著者の水谷惟紗久は、本学会会員であり、本書の内容の一部は本学会においても発表されているが、現在は、日本歯科新聞発行の月刊『アポロニア21』の編集長をつとめているジャーナリストである。そして、本書に使用されている資料のほとんどは、著者の母校である早稲田大学図書館が契約している「The Eighteenth Century Collection Online: ECCO」と「British Newspaper 1600-1900」等の電子データベースにより、検索したものに基づいており、電子ライブラリを活用したものとこのことである。

本書の内容は、巻頭に18世紀のイギリスと世界の関連年表が掲げられ、第1章 美的欲求に応えるデンティストの登場、第2章 歯が「死」に関連していた時代、第3章 18世紀資料に見るデンティストの諸相、第4章 歯科口腔領域に関する書物、第5章 「近代外科技術の父」の書から知るデンティストの業務範囲、第6章 歯科外科医、シュバリエ・ラスピーニのビジネス、第7章 そして、日本の歯科医療はこれからどこに行くの

か、となっている。参考文献として、巻末に114編の論文が収載され、さらに付録として2編の資料がつけられていると言った盛り沢山の本になっている。

最初に、18世紀のイギリスにおいて、歯科医療関係者として「歯抜き」から「デンティスト」がどのように誕生したかを、当時の新聞等により明らかにしている。それは、疾病構造の変化が原因の一つと考察されていて、最初は歯が原因となって「死」に至る病気に対応していたものが、美容的な要求に応えるようになってきたこと等が述べられている。王室や貴族御用のデンティストが、副業として今でいう口腔グッズの販売をしていたこと等は、わが国においても口科医が歯磨きを販売していたこと等と重ね合わせると、興味のある事項であると思われる。また、当時のデンティストの広告や人名録などの記載から、都市部における多彩なデンティストの生活ぶりが推察できるとしている。しかし、現在の状況を見ても、広告を出している者は、その職種の一部に過ぎないことから、これをもって全体を類推することは、少々無理があると思われる。

また、当時の一般啓発書の中に歯や口腔についての記述がみられ、庶民の関心が高かったことが示されているが、これも『養生訓』等と同時代であることと考え合わせると興味深いものがある。この時代には歯科口腔領域の書籍はそれほど多くは出されていないようであるが、その目次を見ると、オーソドックスに書かれていることが分か